

“弁当の日”九州が最先端



“弁当の日”を楽しむ大学生ら114月、福岡市東区箱崎の九州大学箱崎キャンパス

子どもたちに弁当づくりを体験させることで、生きる力を身につけさせ、感謝する心を育てようという“弁当の日”の実践が九州で広がっている。二〇〇五年三月末時点でゼロだった九州の実施件数は、この一年半で急増。五十件を突破して、全国の七割強を占めるほどになった。小中高校や教育委員会など教育機関が主体になるだけでなく、大学生が仲間を集めたり、父母らが企画したりと、「九州方式」ともいえる新たな流れも生まれている。

大学生や父母らも企画 全国7割強の55件

“弁当の日”は、受験勉強ばかりが重視され、生活の中から生きる力を学ぶことが軽視されている現状を危ぶんだ高松市立国分寺中学校の竹下和男校長(五八)が提唱。〇一年、香川県でスタートした。九州では〇六年春、本紙の長期企画「食卓の向こう側」で紹介されたこともあって、八月末現在で五十五件までに増えている。今年四月には、九州大学、西南女学院大学短期大学部、福岡教育大学の学生らが実行委員会をつくって、ワークショップ形式で開催、八十人を集めた。十月二十七日には、福岡県内の十大学の学生が協力し、三百人規模に拡大した実施を予定している。実行委員長の大分県、有村恵さん(三三)は、「食を学ぶことで、

私も周りもハッピーになる。この喜びを友だちに広げたい」と意気込んでいる。また、大分県日田市の地域と学校でつくる同市連合育友会母親部は「食育は本来、家庭の問題。学校に任せるだけでなく、自ら動く」と、市内四十三の小、中学校に呼びかけを始めた。三日、実施した同市立大明中学校では、個性あふれる弁当が並び、親子双方から「やってよかった」という声が上がったという。

九州の実践は画期的

竹下和男・高松市立国分寺中学校長の話 質、量ともに九州の実践が群を抜いている。学校や教育委員会主導でない九州の動きは画期的で、この方式が全国に広がってほしい。